

自由遊びにおける言葉の育ち

—どろ遊びを通して—

法 兼 あす香・安 藤 千 秋

I. はじめに

平成30年4月に改訂された『幼稚園教育要領』には、5領域のねらいが「生きる力の基礎となる心情、意欲、態度」を含めて「資質・能力の3本の柱を育む」となり、このねらい及び内容に基づく活動全体を通して幼稚園修了時の具体的姿「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目が具体的に挙げられ、小学校教育との円滑な接続を図ることが示されている。保育総合研究会(2018)は、5領域のねらい及び内容に関して、健康:(ねらい)見通しをもって行動する(内容)食べ物への興味や関心をもつ、人間関係:(ねらい)工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、環境:(内容)日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら、言葉:(ねらい)言葉に対する感覚を豊かにしが追加文言と記している¹⁾。

また、『幼稚園教育要領』第4節「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」では、「3指導計画の作成上の留意事項」の(2)に「幼児が様々な人やものと関わりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するよう

にすること」²⁾とあり、幼児の実態や状況に応じた指導計画の作成上の留意点が示されている。

秋田(2013)は、「幼児期にこそ培いたい豊かな遊びと暮らし、学びはその遊びや暮らしの中にあるのであって他者との出会いやものとの出会いの中で懂れていくことによって、さらに活動やものに惹かれていく姿があります。・・・(略)・・・懂れて惹かれていくと、その中で自分も同化して、いっしょになって、なりきるとか浸りきる時間をどう保障していくかが、子どもが深く夢中になっていくホンモノ保育とか、懂れから遊びへというときに、とても大事なところではないか」³⁾と述べ、懂れから遊びこむ過程として5つの項目①他者との出会い、②ものとの出会い、③出来事の中での同化 事象の中に身を置く、④みたてやファンタジー 試行錯誤 わがものとする、⑤持続発展的深化・変形、を挙げている。

加藤・大國(2015)は、幼児期の言葉の獲得を幼児期の発達特性と幼稚園の教育の視点から、言葉の育つ環境、幼児期の特性と幼稚園の教育、保育者の役割と言葉について考察し、教師としての役割を改めて考えている⁴⁾。また、藤塚(2017)は、5歳児の自由な遊び場面における会話の発言を収集し、対人関係の発達のプロセスや言葉の機能発達についての考察から、互いの同意・受容するだけでなく指示したり拒否しながら言葉上では厳しいが仲間関係は維持しながら遊ばれていくことが報告している⁵⁾。

今回の研究は、筆者が関わった4歳児クラスの1年間の記録の中で、クラス子どもたちが夢中になって遊んだ「どろ遊び」に着目し、一人の男児を中心にどろ遊びを通して言葉の育ちを考察していく。考察する項目は、秋田(2013)が遊びこむ過程

令和2年11月30日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)8051 FAX 0877(49)5252
Email 法兼: darumachan1975@au.com
安藤: ando@kjc.ac.jp

として挙げた5つの項目の中から、遊びを通してどのように言葉が育つか、①他者との出会いによる言葉の育ち、②ものとの出会いによる言葉の育ち、③みたくてや試行錯誤による言葉の育ち、④遊びの持続発展する言葉の育ち、この4項目の観点から遊びと暮らしの中での言葉の育ちを考察する。筆者は、この研究から子どもが遊びを通して、他者との関わりや素材との関わりから育つ言葉、遊びの工夫や発展から育つ言葉について幼児理解を深め、教師の援助や指導計画の改善に役立てることを目的とする。

II. 研究方法

研究対象：香川県S市内国立K幼稚園 4歳児クラス（女児14名、男児16名）

研究方法：4歳児クラス担任補助としてクラスの子どもたちに関わっている。園庭での遊びの中でどのように言葉が育つかについて、T児の遊びを中心に考察する。

観察期間：2019年4月～2019年10月

観察場所：K幼稚園園庭

III. 結果と考察

K幼稚園では園の通年の遊びの一つとしてどろ団子遊びがある。子どもたちは、園のどの場所の土を使えば芯が固くなるか、様々な場所の土を試したり、どうやったらより粒子の細かいものができるのか、日々試行錯誤している姿がある。3歳児は、まず存分に泥に触れて遊ぶ楽しさを感じ、4歳児や5歳児が作っているどろ団子に遊びの中で出会う。それを見て、興味関心を抱き、自分も作ってみようと試行錯誤している。教師は、子どもたちが自ら考え工夫し、友達とつながっていけるように泥の配置場所、砂や土の量と種類にこだわり、時期に応じてどろ遊びの環境を整備している。図1及び図2参照のこと。

今回観察対象とするT児は、市内の他園より年中クラスに4月入園した。入園当初は、自分の思うようにならない場面や、やっていることを邪魔されたと感じた時、言葉よりも先に友達を両手で突き飛ばすという行動で自分の気持ちを表現していた。ま



図1



図2

た、友達を受け入れることが難しく、自分の思いが言葉で伝えられない場面も多く見られた。自分の思いを上手く表現できないもどかしさから、大声で叫んだり泣いたりということもある園児である。

事例1 <トイで遊びたい> 4月

T児はこの頃、登園後、毎日砂場へ向かう。水道の蛇口を最大にひねり、砂場から園庭の中央の方まで長い川をつくることを楽しんでいる。

蛇口を最大にひねり、水をたくさん出し続ける面白さを感じていたT児だが、数日後、教師が用意していたトイ（雨どい）に興味をもち、砂場の枠にトイをかけて、バケツで水をくみ、そこから水を流すことを楽しみ始める。

T児「流れた！」

H児「もっと水をもってきて」

T児は、水が流れたことを喜んでいる。そのうちトイを何本かつなげてコースのようなものを作った。そのコースを見て、H児もそこで遊び始めた。T児は自分の作ったトイのコースから流れる水の様子を黙々と楽しんでいて、H児にもっと水をもってくるように言われたT児は、バケツを増やしてより多くの水を流した。

T児「凄い！速く流れた！」

次第に砂場だけではなく園庭へと遊ぶ場所が広がっていった。

T児「ここは高速道路です」

H児「違うよ、電車が通るところだよ」

T児「高速道路の方がいいのに」

教師「かっこいいコースだね、高速道路でも電車の線路にもなりそうだよ」

H児「じゃあ、両方は？」

T児「瀬戸大橋みたいや」

※図3

事例1の考察

- ① 他者との出会いによる言葉の育ち・・・他者との関わりが少しずつ増えることで、同じ遊びを共有する友達と一緒に時間を楽しむ姿があり、自分なりの言葉で自分の思いや遊びの楽しさを表現する姿がある。
- ② ものとの出会いによる言葉の育ち・・・砂場と水、バケツ、トイ（雨どい）などのものとの出会いから、さらに車や電車等新しいものを加える。素材が増えることで友達と言葉を交換し合ったり、イメージを共有したり言葉の表現もみられた。
- ③ みたてや試行錯誤による言葉の育ち・・・ものを使用した工夫を試行錯誤する姿がある。友達と遊びを共有し始めると遊び方について意に沿わない場面から、ものの取り合いや貸し借りのトラブル、場所取り等ぶつかる場面も多くなる。（下線部）そこでは、それぞれの思いを伝え合い、どうするのか考えることもあった。
- ④ 遊びを持続発展する言葉の育ち・・・友達とイメージを出し合い、ぶつかったり考えたりし合

いながら遊ぶことで、自分一人だけではなく友達と一緒に遊ぶことの面白さに気付いている。教師は、遊びの中で、それぞれの姿や考えを受け止め言葉を掛けることから、遊びの展開につながっていると思われる。

事例2 <僕の作ったコースは僕の！> 5月24日

T児「Rくん、嫌や！」

教師「何が嫌なの？」

T児「Rくんは流さんとして！僕の作ったコースやから」

言われたR児は隣で別のコースを作る。またその隣ではH児がコースを作っている。それぞれが、それぞれのコースをちらちら見ながら遊ぶ。

H児「あ、まがるところはこれを使ったらええよ」

R児「水がもれる、なんでやる」

T児「それ、こうせないかん（トイの上下を変える）」

※図4

事例2の考察

- ① 他者との出会いによる言葉の育ち・・・R児が自分と同じ遊びを共有することが受け入れできず拒否から始まる。R児下線の言葉から刺激を受け、自分の思いを言葉にしながらがコース作りを楽しむ姿がある。R児の言葉を注意して聞くが、自分の思いを相手に分かるようには話せていない。
- ② ものとの出会いによる言葉の育ち・・・いつものトイ（雨どい）の使い方に工夫がはじまる。R児やH児の工夫を見たり言葉を聞くことから、作りたい形について言葉下線を発しながら作業を進めることで、互いの言葉を受け入れている様子があった。
- ③ みたてや試行錯誤による言葉の育ち・・・同じ遊びをするR児H児の工夫を見て、自分流のトイの重ね方や水の流し方を工夫している姿が見られる。
- ④ 遊びを持続発展する言葉の育ち・・・教師は子どもと共にコース作りを楽しみながら子ども同士の会話を「ほんとだ、Tくんそれ使ったら上手くできたね、成功！」「Hくん、教えてくれ

てありがとう」というように互いの行動や言葉を価値づけていった。このような子ども自身の体験と、教師が幼児の言葉をつなぐ日々を積み重ねることで、同じ遊びを楽しむ子どもたちは互いを知り、遊びを介してつながっていくことができる。



図 3



図 4

事例3 <投げると嫌な人がいるんだ>6月6日
A児「Tくん、やめて、嫌だ！」園庭から大きな叫び声があがる。見るとT児は園庭に水がしみ込み泥になった土を、大きなスコップで思いっきりすくっては放り投げて楽しんでた。

教師「Tくん、泥がとんでくると嫌な人もいますよ」

T児「このぐらいいは?」「じゃあ、こっちは?」
と、友達の反応を確かめる様子でさっきよりも弱く投げてみたり、違う方向に飛ばしてみたりしてみせた。

A児「もうちょっと弱くして」「うん、それくらいなら大丈夫」

とT児に答える。その後は思い切り泥を投げることはやめ、A児達と一緒に泥を掘ることを楽しんでた。※図5

事例3の考察

- ① 他者との出会いによる言葉の育ち・・・泥を飛ばすことが楽しかったT児だが、教師の言葉を受け止め「このぐらいいは?」と自分のどこがダメだったのか、こうすれば友達が分かってくれるかな、というような感覚が言葉を介しながら表現できるようになった。
- ② ものとの出会いによる言葉の育ち・・・大きなスコップを使うようになったことで、沢山の泥をすくうことができるようになった。泥を掘るのは楽しいけれど投げると友達が嫌な気持ちになる、ということも分かり、友達の表情や言葉を自分なりに受け入れながら、やりとりできるようになった。
- ③ みたてや試行錯誤による言葉の育ち・・・「このぐらいい」「じゃあ、こっち」というような相手の表情を観察しながら動作を入れ、言葉に対する感覚を表現するようになった。
- ④ 遊びを持続発展する言葉の育ち・・・この時期は、教師が間に入りそれぞれの言葉の表現を受け止めながら友達へと言葉をつなぐこともある。徐々に教師や友達の言葉に耳を傾けるようになり、友達の表情を見ながら気遣うような言葉をかけるようになった。また、教師がいなくても友達と遊びを楽しむ姿がみられた。



図5

事例4 <どろ団子壊した> 6月21日

M児の泥だんごをT児が壊した。そして、それに怒ったR児が、T児に泥を投げたというのだ。

R児「ごめんって言うたって、そんなんではいかん!」

T児「Rくんが泥を投げてきたんだ、僕にぶつけてきた」

R児「だってな、Mちゃんの大事などろ団子をTくんは、わざと投げて壊したんで!」

T児「Rくんは悪い!」

そこへ、泣き顔だが少し落ち着いた様子のM児が教師とやってきた。その時には、教師と一緒に新しいどろ団子を作り、それを手に持っていた。

どろ団子を壊されたのはどうやら少し前の出来事らしい。

その時にはたくさん子どもたちが集まってきた。まわりの子ども達は

「Tくんが、Mちゃんのどろ団子を投げたんがいかんわ」

「でも、Rくんも泥をぶつけたのはだめやった」

「Mちゃんは、もう、泣いてないで」

「Tくん、ちゃんとMちゃんにあやまった?」

「私もどろ団子壊されたとき凄く悲しかったよ」

「Mちゃん、何日もかけて磨いてたのに」

等、自分なりにその状況を見て、こうするべきではないのかと考えたり、思ったことを口々に表出している。

そこで教師が語り始めた

「Mちゃんが一生懸命に作ったどろ団子、Tくんは投げてしまったんよな。それで、Mちゃんが一生懸命作ってたの知ってたから、Rくんは怒ったんだよね。」誰を責めるのでもなく、一人ひとりの気持ちを代弁するように語っている。

「Tくんも、Mちゃんが悲しくなったの分かるよね。」

T児は、話を聞いている。M児とR児は、ひとつひとつうなずきながら聞いている。まわりにいる子どもたちは、その状況を見ながら静かに話を聞いている。その時には各自が思ったことを口には出さず、じっと教師の言葉を聞いている、という状況だった。

事例4の考察

- ① 他者との出会いによる言葉の育ち・・・日常の出来事を「自分のこと」として受け止められる子ども達の姿がある。それは、友達が一生懸命に作っている姿を知っているから発する言葉である。そして、自分にもその体験があり、その状況を自分のこととして考えている。(波線部分)そして、自分達の気持ちや状況を、教師が知ってくれていることで、何か起こった時の状況を教師の言葉を通して、客観的に理解することができる。また、状況を考えひとり一人の思いが伝わるように投げかける教師の言葉があった。
- ② ものとの出会いによる言葉の育ち・・・M児のどろ団子を投げてしまったT児。この時T児は、どろ団子がM児にとって大事なものという意識はあまりなかったのかもしれない。しかし、友達から浴びせられた自分を攻めるような言葉から、とてもいけないことをしてしまったことに気付くことができた。T児にとってのどろ団子、M児にとってのどろ団子、R児にとってのどろ団子、それぞれにその物に対しての思いが違うからこそ起こった出来事だった。
- ③ みたてや試行錯誤による言葉の育ち・・・これまでのどろ団子に対する個々の過程が「私もどろ団子壊されたとき..」という子どもたちの会話の中に表れている。T児は、その言葉だけで

理解することは難しいのかもしれないが、これから体験を重ねていくことで言葉の理解へとつながっていくと思われる。

- ④ 遊びを持続発展する言葉の育ち・・・どろ団子を落としたり踏まれたりという事件は、教師は壊したT児に対して、叱るような言葉をかけるのではなく、その場の状況や子どもの気持ちを言葉にして伝えている。教師の言葉を聞き当人だけでなく、周りの子どもたちもその場の状況を理解することができた。また、教師はどろ団子を壊したことを悪いこと、という言い方ではなく、子どもたち一人ひとりがその状況に対して、どう思うかを考えるように伝えている。

事例5 <どろ団子が壊れた> 10月1日

2学期に入り、友達のどろ団子作りを見よう見まねで自分もやってみようとするようになったT児。この日も2週間前に芯を作って、しばらく水抜きで寝かせていたものを朝からさら砂工場（サラサラの砂が集まっている園庭の一部分の場所）でどろ団子を磨いていた。ある程度磨き終え、T児はどろ団子をクラス前のテラスに置き、他の遊びを行っていた。

藤棚下では、K児、E児、H児が落ち葉を集め焼き芋ごっこをしていた。焼き芋は、各自が作ったどろ団子だ。

E児「もうこれは焼きました、熱々だから気を付けて下さいね」とお客さんになっている教師とS児に手渡す。

教師「わあ、あちちっ、ほんとだ、あつあつで美味しいです」

S児「あつつっ！」

E児「お持ち帰りもありますよ」

教師「それじゃあ、5個持ち帰りをお願いします」

E児「分かりました。新聞に包みますね」

教師とS児は熱々の焼き芋に見立てたどろ団子を手に持って食べる真似をしている。

そこへ様子を見ていたT児がやってきた。

T児「あ、焼き芋！僕も持っています」

E児「じゃあ、一緒に焼き芋にしますか？」

T児「はい、持ってきます！」

T児は張り切ってテラスへと駆け出して行った。満面の笑みで「お待たせー」とどろ団子を手に戻ってきた瞬間、手からどろ団子が転げ落ちた。「あっ！」そこにいた全員が声を上げた。T児は声も上げずに固まっている。みるみるうちに目には涙があふれ出し、口はへの字になり、体操服をギュッと握って一点を見つめている。一瞬みんな止まったが、E児が「大丈夫、私達のを使ったらいいよ」と言ってくれたことで、T児も気持ちを切り替えて焼き芋ごっこを楽しむことができた。

事例5の考察

- ① 他者との出会いによる言葉の育ち・・・ここでは、落ち葉での焼き芋ごっこの中で、「～です」「～ます」と敬語調で会話をするT児の姿がある。その遊びの状況が分かり、すぐに遊び込んでいることが分かる。ごっこ遊びの中で自分自身がお店屋さん、お客さん、大人同士等、現実の自分ではない姿に一時的に役割を演じているからである。ここでは、いつもの砂場での仲間だけではなく、ごっこ遊びに興味がある新しい友達ともかかわることとなった。そのことで、いつもとは違う友達のことを知る機会となった。
- ② ものとの出会いによる言葉の育ち・・・入園当初には同じ物（トイ）を使って遊ぶことも難しかったT児だが、この頃には状況に応じて、自分から楽しめるようになった。友達と一緒に遊びの中で「言葉」を一つの手段として、「どろ団子」のことを「焼き芋」に例え、自由に使い存分に遊びに入り込むことでより豊かな言葉が引き出されるようになった。
- ③ みたてや試行錯誤による言葉の育ち・・・自分のどろ団子は落として割れてしまったが、友達の作ったどろ団子を使って焼き芋ごっこを楽しむ姿が見られた。事例中の会話では、友達と共通の『焼き芋』という言葉が遊びを構成している。繰り返し遊びを積み重ねていくと、よりごっこ遊びのイメージが高まり、他者とのかわりも広がるようになってきた。同時に、売り手や買い手の役割によってその場に応じた言葉を使い分けられるようになった。

- ④ 遊びを持続発展する言葉の育ち・・・共通のイメージの中で遊んだ経験は、遊びの中で言葉を表現することが楽しいものだという感覚を落とし込むことになる。また、教師が遊びの中に入り「それじゃあ、5個持ち帰りをお願いします」と言葉を追加することにより子どもたちのイメージがより膨らみ、言葉を引き出す学びとなっている。

事例6 〈大丈夫だよ〉 10月3日

今日もT児はどろ団子を作っていた。お弁当の後、藤棚下の黒土のあるところに行くと「丸いのは先生が作って」と言う。芯を私に作って、ということだ。午前中に自分で作ったどろ団子が、お弁当前に割れてしまっていて、今度こそは固い芯を、という思いがあるようだった。私は手にギュッと力を込めて固い芯を作り、T児に渡した。T児は、それを持って、さら砂工場へ向かった。そこには既に3人の女児がいて、自分のどろ団子を磨いていた。T児も加わり「今度のは固いからね」と言いながらさら砂をかけ始めた。

しばらくすると急に「ウーン」というT児の声がかえってきた。そこには涙を流しながら大声で叫んでいるT児の姿があった。足元にはさっき作ったどろ団子が割れている。園中に響くような大きな声で泣いているので周りの人達も集まってきた。すぐ横にいたA児は何も言わずにT児をギュッと抱きしめた。同じく横にいたE児は、変な顔をしてT児を笑わそうとした。「どうしたの？」と玄関口からさら砂工場を覗いたH児は、そこにいた友達に状況を聞いて黙って頷いた。集まってきた友達からは「大丈夫だよ」「また作ろう」「手伝ってあげようか」と口々に励ましの言葉が掛けられていた。

事例6の考察

- ① 他者との出会いによる言葉の育ち・・・直接言葉はかけなくても、ただ黙ってT児の気持ちを汲み取り、ギュッと抱きしめたA児がいた。E児は、悲しむT児に何とか笑ってほしいと思い、自分の思いついた方法（変な顔をする）でその状況をどうにかしたいと行動した。また、

H児は、その状況の説明を受け、T児の気持ちを理解し、過去の自分の体験を思い出しT児の気持ちが分かったことで黙って頷いた。それぞれがT児の出来事を自分事として汲み取り、自分なりの言葉で励まそうとしているように見てとれた。（下線部分）また、T児はこの友達の行動を素直に受け入れている姿があり、自分なりに友達の言葉を受け止め、自分なりに感じていた姿があった。

- ② ものとの出会いによる言葉の育ち・・・この頃には、T児はより固いどろ団子を作りたいと思うようになっていた。固いどろ団子の方が割れにくく、磨き上げることができることを友達の姿を見て分かってきていたのだ。「丸いのは先生が」という言葉は、どうしてもピカピカの光るどろ団子を作りたいという気持ちの表れである。
- ③ みたてや試行錯誤による言葉の育ち・・・「今度のは固いからね」という言葉は、誰かに向かって言った言葉ではなく、自分自身に言い聞かせているように聞き取れた。『今度こそは壊れない』という強い思いが言葉に表れている。
- ④ 遊びを持続発展する言葉の育ち・・・下線部は、固いと信じていたどろ団子が割れてしまい、もう諦めようと思っていた時の友達からの励ましの言葉だった。自分の気持ちを理解してくれる教師や友達の存在から、他者が自分の気持ちを汲み取って言葉を掛けてくれること、行動してくれることで、自分自身の思いを言葉で表現しようとすることにつながる。そこには心が動かされるような体験が伴うケースが多い。

IV. まとめ

冒頭部分で述べたように、砂、泥を使った遊びを中心にT児を通して4歳児を中心とした幼児期の遊びの中での言葉の育ちについて考えた。

言葉を獲得していくうえで最も大切だと考えられることは、言葉で伝えたい、人（教師・友達）と共有したくなるような体験があることである。その体験したことを話したり聞いたりするなかで、同意してもらったり、見つめ合ったり、微笑んでもらったり

り、頷いてもらったり等、言葉以外の温かい関わりやつながりが生まれ、その温かさが教師や友達への信頼を生み、言葉で伝えようとする意欲へとつながる。まさにそれは「他者との出会いによる言葉の育ち」であると言えるのではないか。そして、そこには自分の「やりたい」体験が土台にあることが必要である。そのために教師は、子どもの興味や関心がどこにあるのか見取り、発達の過程で大切にしたいことと関連させながら保育環境を整えていくことが求められる。T児の場合、水を流すことに興味があることを知った教師は、最初1本の短い雨どいを準備した。まずはT児自身がゆっくりと水を砂に流すことを楽しめるよう準備した。ここでもし、沢山の人が集まるようなものを準備しておいたなら、T児は存分に水の流れを楽しむことはできなかつただろう。言葉の育ちには、まず子ども一人ひとりがものと向き合うことを楽しめる環境をつくる必要がある。

「ものとの出会いによる言葉の育ち」は、子どもの姿を教師側が見取り、子どもと教師で作り合う環境によってさらに深まるものであると分かった。ものとの出会いを存分に楽しめるようになってくると、更に楽しくしようと試行錯誤するようになってくる。また、試行錯誤できるような環境を教師は考える。その状況は時には偶然的でもあるが、その時を見逃さず教師がそこにもものやことの点を打つことで、子どもの活動は深まりひと、もの、ことが絡まって「みたとや試行錯誤による言葉の育ち」へとつながっていくのである。

そして全ての事例を通して言えることとして、一つひとつの、もの・こと・人との体験の積み重ねが発達の土台となり、あらゆる育ちの基になるということである。言葉を交わすこと、表出することにより更に人とつながったり遊びが深まったり発展することができると言える。日々の積み重ね、繰り返すにより獲得していくのが「遊びを持続発展する言葉の育ち」である。この一年間、T児だけでなく、周りの友達も互いを通して自分を振り返ったり自分に置き換えたり、それをまた友達に伝えたり、そういう日々を積み重ねながら言葉で表出できるようになった。

まだまだ教師を介さないと通じないことや、困っ

たときには泣くこともあるが、互いに知り合っている仲間がいることは、どこかで誰かが助けてくれるような状況があり、時間が経つことで落ち着いて話せたり、手紙で「ごめんね」と書いたり出来るようになっていく。今後、小学校以降新しい仲間との出会いがあった時にも、獲得した経験が大きな力になると思われる。

今回T児を通して見た、他者、ものとの出会い、そして試行錯誤しながら遊びを持続発展していく4歳児なりの言葉の育ちの過程の見取りを、5歳児の発達過程の見取りへとつなげていけるように役立てたい。また今回の事例では、「どろ遊び」という自由度が高く様々な人が関わるのでできる遊びだからこそ、教師が意図していない偶然できた状況というものが多かったように思う。そこから気付いたことを、今後筆者自身が指導計画の中に取り込み計画・支援していくことができるのではないかと感じた。そしてT児においては今後、5歳児の集団の中から、より複雑な自分の感情や表出ができるようになる言葉の育ちの過程について考えていきたい。

謝 辞

本研究のためにご協力いただきました幼稚園の先生方と園児の皆様は心より感謝いたします。

参考文献

- 1) 保育総合研究会, 2018, 『平成30年度施行 新要領・指針サポートブック』, 26頁
- 2) 文部科学省, 2018, 『幼稚園教育要領解説』, 100頁
- 3) 秋田 喜代美, 安見 克夫, 2013, 『秋田喜代美と安見克夫が語る写真で見るホンモノ保育』, ひかりのくに, 62-63頁
- 4) 加藤 ひろみ, 大國 ゆきの, 2015, 「幼児期の言葉の獲得: 幼児期の発達特性と幼稚園での教育」, 『東京成徳短期大学紀要』第48号, 23-33頁
- 5) 藤塚 岳子, 2017, 「幼児期における会話の特徴と対人関係の発達過程: 幼稚園年長児の自発的活動場園を通して」, 『東海学園大学教育研究紀要』第1巻, 143-154頁